

二〇二五年度入学試験問題

国

語

(五〇分)

第一回 二月一日実施

〔注意〕 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校

□ 次の文章は、子どもたちと社会との関わり方について書かれたものの続きです。これを読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

こうした危険から子どもたちを守るのは、やはり基本的には家族の愛情です。しかし、その愛情がいわゆる溺愛^{できあい}では、外の世界で自分の戦いをはじめたときの支えにはならず、子どもたちは二つの世界のあいだで引き裂^きかれることにもなりかねません。それに、愛されることだけから自尊心を得ようとすると、私たちは相手にしがみついてしまいがちで、そうになると、温かいはずのつながりが鎖^{くさり}のような束縛^{そくばく}になってしまいます。ですから、子どもたちが自分で自尊心を築いていく時期になったら、大人は愛情をそそぐことで支えると同時に、子どもの戦いぶりを見ていて、いよいよ必要なときにだけ手をさしのべ、ときには軌道^{きどう}修正するくらいのほうがいいのです。

① そこで大きな力を持つのが、文化です。衣食住の必要を満たすだけでは、文化とは言えませんが、たとえおなじ食べものでも、盛りつけにちょっと工夫^{くふう}をこらせば、それはすでに文化です。□ A、道をただ急ぐかわりに、草木の芽生えを楽しみながら歩けば、それはすでに文化的な活動です。芸術作品の創作も、鑑賞^{かんしょう}も、本来はそういうことからはじまったわけで、すべてはその延長上にあるのです。このように、身のまわりの物事を楽しみ、生活にちょっと手間をかけて彩^{いろど}りを添^そえることは、人間にささやかな自尊心^{あたま}を与えてくれます。そうやって手に入れた自尊心は、ささやかではあってもゆらぎはせず、積もり積もってしっかりしたものになっていきます。それがあれば、勝ち負けに悩^{なや}むことも他人を見下すこともなく、ゆったり構えていられますし、年を取ろうと、貧しくなろうと、逆境におちいろうと、自尊心をまるごと失ったりはせずすみません。それが文化というもののありがたさで、大人はその楽しみ方を子どもに手渡^{てわた}していかねばなりません。読書の楽しみも、そのひとつなのです。

では、本を読まなくなった子どもたちに、どうやって読書の楽しみを手渡してあげればいいのでしょうか。それについての具体的な話

に入る前に、もうひとつだけ、生活文化を伝えることと、本を読むこととの関係について、南アフリカ連邦で子どもの本に関する仕事をなさっているジェイ・ヒールさんからうかがった、いささか②ショッキングな話を紹介させていただきますと思います。

みなさんは、子どもの本にかかわる人たちの国際組織である国際児童図書評議会（IBBY）をご存じでしょうか。この会は、子どもの本の世界でも重要な賞である国際アンデルセン賞を授与していることでも知られています。ヒールさんはその選考委員として一九九九年に来日され、私の仲間の集まりでも講演をしてくださいました。ヒールさんはイギリスの出身ですが、若いころから南アフリカで先生をしたり、子どもの本の執筆や編集にたずさわったりしてこられたそうです。私は、アパルトヘイトの廃止という大きな一歩を踏み出した南アフリカで、子どもたちがどんな本を読んでいるのだろうと興味を持っていたのですが、ヒールさんにそのことをうかがってみると、子どもたちは昔もいまも本を読んではない、という答えが返ってきました。

でも、昔といまとで、その理由は大きくちがっていました。昔、本が読まれなかったのは、「アフリカは物語の国だから」だそうです。それはどういふことかという、大人が子どもたちを集めていろんなお話を語り聞かせることが、当然のこととしておこなわれていた、ということ。その内容は、部族の歴史、してもいいことといけないことについての規範や習慣、楽しみのお話と、大きく三つに分かれていたそうです。アフリカの人たちは音楽が好きで、語りにはしばしば音楽も含まれ、大人も子どももいっしょになって楽しむ場にもなっていました。 **B** アフリカの人たちは、本はヨーロッパのもので、自分たちのものではないと考えており、学校では読んでも、学校を一步出るともう読もうとはしない、ということでした。

しかし、そうした語りの習慣は、南アフリカでも急速に崩壊しつつあるそうです。それはテレビが普及したため、貧しい家にもテレビだけあり、子どもたちは学校から帰るとすぐテレビをつけて、日本のアニメなどを見ているのだということでした。その結果、子どもたちは大人の語りを聞こうとしなくなり、また、語れる大人も少なくなっているそうです。要するに、南アフリカ連邦においては、欧米や日本のような本の時代を経ることなく、語りによって知識や知恵、楽しみなどが手渡された時代から、一足飛びに映像メディアとコンピューターの時代に突入したということです。

④

この状況を考えてみると、いくつかの問題が浮かび上がってきます。まず、小さな共同体で大人から子どもへと語りによって手渡されていた知識や知恵、楽しみなどは、子どもたちの顔を見て、うまく選択され、プログラムされていたはずだ、ということです。子どもたちの年齢によって、あるいは季節や状況などによって、「そろそろこれを聞かせておこう」「いまがこれを話すのいいときだ」と、さまざまな配慮があったはずです。しかし、テレビではそうはいきません。テレビから流れ出てくる番組は、たとえばいいものばかりであったとしても、見る子どもに合わせてプログラムされたものではありません。それをずっと見ていても、その共同体の大人たちが、最低限これだけは伝えたいこと、言っておきたいことが、ちゃんと含まれているわけではないのです。

C

、そのかわりをするのは学校教育であって、テレビにそれを求めるべきではないのかもしれない。しかし、いまの日本の子どもたちを見てもわかるとおり、子どもに対する影響力の大きさでは、学校はテレビに押され気味です。それに、テレビから流れてくる知識や情報の総量はあまりに多く、たとえば大切なことがきちんと含まれていたとしても、ランダムな情報の洪水のなかに埋もれてしまい、「最低限これだけは」ということが子どもたちの心に届くとは期待できません。たしかに、語りによる昔ながらの教育は古くさく、視野の狭いものだったでしょうが、それぞれの共同体がその子どもたちに対して持っていた教育力が、そんなふう

⑥

に根こそぎ失われてしまうというのは、とても恐ろしいことではないでしょうか。もうひとつ気がついたのは、アフリカが「物語の国」であった時代や、日本の農村で本なんかなくても子どもたちが立派に育った時代、人々の記憶力はすばらしいものだったにちがいない、ということ。記憶力といっても、それはいわゆる暗記力とは別ものです。物語を語ることがうまくて、聞き手を自然にお話のなかに引き込んでしまえるような語り手は、物語を丸暗記しているわけはありません。語りはじめれば、そのお話の登場人物たちが頭のなかで自然に動き、それをその場で言葉にしていくというのが、本

注 *アバルトヘイト……有色人種に対する差別政策。

*ランダム……目的や考えがないまま、偶然にまかせること。

物の語り上手です。もちろん、歌の文句や、特徴的な決まり文句などは、調子のよさで記憶しやすくなっていて、そのとおり語ることができません。お話にかぎらず、さまざまな生活の知恵なども、ちょっとした記憶法に助けられながら、昔の人の頭のなかには、信じられないほどどっさりしまいこまれていたものです。

本の時代になって、私たちは明らかに⑦そうした能力を失ってしまいました。でもそのかわりに、視野を広げることができました。

記憶と口伝えによる教育は、その共同体で生きることにはしか通用しにくいのですが、本を読めば、多様な考え方や文化、専門的知識などを学ぶことができ、自分の共同体を離れて全然ちがう場所へ行こうと、親の世代には存在しなかった問題にぶつかろうと、なんとかやっつけていけるようになります。

展」はありえなかったでしょう。

⑧ という文化なしに、近代のヨーロッパや明治以降の日本のような、急速な「社会の発

展」はありえなかったでしょう。⑨
もつとすばらしいのは、本が単に視野を広げるだけでなく、時空を越えた人間理解を可能にしてくれたことです。記憶と口伝えによる教育は、小さな共同体のなかだけで受け渡されるために、どうしても偏狭になりがちで、場合によってはよそ者への敵意や差別意識を育てることもなりかねません。しかし、本を読めば、大昔の異国の人を親しい友だちのように感じることもできますし、書いたものを残しておけば、はるか未来の人が読んで共感してくれるかもしれないのです。本が普及するようになったころから、昔ながらの小さな共同体は力を弱めはじめましたが、そのかわりに本が世界じゅうの人間を結び、過去と現代をさえ結びつけて、大きな共同体が育ってきたとも言えるのです。

しかし、ヒールさんのお話を聞いてあらためて考えてみると、本の時代になって私たちが失ったものも、ずいぶん大きかったのだらうなどと思わないではいられません。それは何かというと、子どもをよく知っている身近な大人たちが子どもの教育にたずさわることによって、心豊かな大人が持っているバランスのとれた知識や知恵が、その全体的な枠組みごと、子どもに渡されていくという仕組みです。昔の人たちの記憶力はすばらしかっただろう、と言いましたが、いまの私たちだって、ある意味ではすばらしい記憶力を持っています。現代の複雑な社会のなかで生きていくには、大量のルールを覚え、いろんな機械が操作できなくてはなりません。し

かしその総体が、心豊かな大人が持っているべきバランスのとれた知識や知恵かと問われると、とうていそうは言えませんし、それをそっくり子どもたちに手渡せたとしても、それだけでその子どもが心豊かな人生を送っていけるわけではありません。要するに私たちは、人間がその人間性によって人間を育てるといふ基本的な仕組みを、失ってしまいつつあるのです。

⑩ それでも私たちにやれることは何かというと、身近な子どもたちに手渡すものが、なるべくバランスのとれた知識や知恵であり、人間性を形作る全体的な枠組みとなるように、心を配ることではないでしょうか。もちろんそれはたやすい仕事ではありませんが、そこで大きな助けになるのが、本だと思ふのです。本は、ただ手当たり次第しだいに読んだのでは、バランスのとれた知識や知恵を与えてはくれませんが、優れた本は、楽しんで読んでいるだけで、書いた人の人間性や、出てくる登場人物たちの人間性を、知らず知らずのうちに手渡してくれます。子どもをよく知っている身近な大人が、自分がほんとうにいいと思う本を子どもに手渡し、楽しんで読めるように手を貸すこと——それが、生活文化を失った時代の私たちが、子どもたちのためにしてあげられる、数少ないことのひとつなのではないでしょうか。

（脇明子『読む力は生きる力』）

問一

A

C

にあてはまる言葉としてもっとも適当なものを次の1～6からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。同じ番号をくり返し使ってははいけません。

- 1 さて
- 2 だから
- 3 なぜなら
- 4 もちろん
- 5 しかし
- 6 あるいは

問二

——線①「そこで大きな力を持つのが、文化です」とありますが、この「文化」にあてはまらないものを次の1～4から一つ

選び、番号で答えなさい。

- 1 食べものの盛りつけを工夫したり、草木の成長を楽しみながら散歩したりすること。
- 2 芸術作品の創作や鑑賞を行うことによって、だれもが手に入れているもの。
- 3 生活に手間をかけることで彩りを与え、人間にゆとりを与えるもの。
- 4 大人から子どもに手渡されなければならない、身のまわりにある楽しみ。

問三 —— 線② 「シヨッキングな話」とありますが、筆者がシヨックを受けた理由としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ

選び、番号で答えなさい。

1 アパルトヘイト廃止に一步踏み出した南アフリカの子どもたちは環境が^{かんきょう}変わり、本を読む自由を得てさまざまに学んでいると想像したのに、昔からずっと本を読んではいないということやその理由を知ったから。

2 子どもの本にかかわる人たちの組織である国際児童図書評議会の選考委員を務めるヒールさんは、イギリスの出身であるにもかかわらず長年南アフリカで子どもの本の執筆や編集にたずさわっていたことを知ったから。

3 外国人であるヒールさんが南アフリカの子どもたちに読書を広めようとしているのに、当事者である子どもたちが本はヨーロッパのものであつて自分たちに必要なものではないと考えていることを知ったから。

4 世界の多くの国々には生活文化を学ぶために本を読む歴史があるが、南アフリカは大人たちが物語を創作して子どもに語って聞かせることで文化を伝えることができた^{めずら}珍しい国であるということを知ったから。

問四 —— 線③ 「それはテレビが普及^{かまひ}したため」とありますが、「語り」とテレビにはどのようなちがいがありますか。もっとも適

当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 「語り」は対象にとって必要なことを選択して伝えられるが、テレビは対象にかかわらず情報を伝達するというちがい。

2 「語り」は子どもたちを引きつけて大人に関心を^{いざ}抱かせるが、テレビは大人の語りを聞かなくせるといふちがい。

3 「語り」は大人の考えを子どもたちに直接^{ちやく}話すことができるが、テレビは間接的にしか伝えられないといふちがい。

4 「語り」は語り手側の暗記力や表現力が問われるが、テレビは知識や知恵を常に一定の割合で伝達できるといふちがい。

問五 —— 線④ 「この状況」とはどのような状況ですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 南アフリカの子どもたちはテレビを見るのに夢中になるあまり、テレビで言われている事柄やニュースを常に正しいと信じこみ、テレビの内容以外は間違っていると考えるようになったという状況。

2 南アフリカの人たちは元々音楽好きで、大人が子どもたちを集めて音楽にのせた物語を語り聞かせて一緒に楽しんでいたが、テレビは好みが分かれるため子どもたちだけでアニメを見ているという状況。

3 南アフリカの子どもたちは本の代わりに大人から生きた知識や知恵や楽しみごとを直接教わっていたのに、今ではテレビやコンピュータのようなメディアから知識を学ぶようになっていくという状況。

4 南アフリカでは部族ごとに語り伝えなくてはならない部族の歴史や規範が異なっていたのに、子どもたちがテレビで様々な世界の常識を知って、大人たちの言うことを真面目に聞かなくなったという状況。

問六 —— 線⑤ 「語りによる昔ながらの教育は古くさく、視野の狭いものだった」とありますが、「語りによる昔ながらの教育」にはどのような欠点があると筆者は考えていますか。もっともわかりやすく説明している部分を「…可能性がある。」に続くように線⑤より後の文中から五十九字でぬき出し、初めと終わりの三字を書きなさい。

問七 —— 線⑥ 「アフリカが「物語の国」であった時代」とありますが、その時代にアフリカの子どもたちが聞いていた「物語」の内容をもっともわかりやすく説明している一文を——線⑥より前の文中からぬき出し、初めの五字を書きなさい。

問八 ——— 線⑦「そうした能力」とはどのような能力ですか。四十字以上五十字以内で書きなさい。

問九 ⑧ にあてはまる内容を四字で書きなさい。

問十 ——— 線⑨「時空を越えた人間理解を可能にしてくれた」とはどういうことですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 現代社会の人々にとって、先祖のさまざまな行動を反省し、子孫にとって何がより良いもののかを予測できるようになったということ。
- 2 現実世界で起きているできごとにとどまらず、語り手の理想や希望までもがさまざまな話の中に取り入れられるようになったということ。
- 3 今生きている人々のことだけではなく、過去のさまざまな人々の考え方を学んだり未来に思いを伝えたりできるようになったということ。
- 4 同じ年頃の仲間うちで起きたできごとに加えて、異なる世代のさまざまな人々が何をしているか分かり合えるようになったということ。

問十一 ——— 線⑩「私たちにやれること」とありますが、それはどのようなことでその結果どうなると筆者は考えていますか。「私たち」が誰かを明らかにした上で、本文全体をふまえて八十字以上九十字以内で書きなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

五時間目のロングホームルームが始まった。

辛島先生は最初だけ教卓で、

「この時間は、前回から持ち越した体育祭のスローガン決めをするので、荻野さんと佐々木さんに進行をお願いします」

と話す*と、オブザーバーに徹するように、教室の後ろのロッカーのところまで下がった。優希は誠を振り返って目を合わせると、

同時に席を立って教卓に向かって歩いた。

両こぶしに力を込めると、優希は①を切った。

「では、体育祭のスローガン決めを行いたいと思います。前回の話し合いでは『必勝』と『心ひとつに』という案が出ましたが、なにか新しいアイデアを考えてきてくれた人は、いますか?」

優希の問いかけに、クラスのみんなは目をそらすように、机の上を見たり首をひねったりしている。

「だーかーらー」

流星の大声が響く。

「田中くん、発言は挙手願います」

優希がたしなめると、流星はだるそうに「はーい」と手を挙げた。

「田中くん、お願いします」

誠は貝のように押し黙ったままで、ひとことも口を開かない。

「前のときも言ったけどさ、このふたつを合体させてさ、『心ひとつに必勝』でよくね? さっき全員リレーの練習で一位になったの、超盛り上がったじゃん。心ひとつに優勝目指してさ、感動したわけじゃん」

流星が言うと、野球部員だけでなく、瞳子や他何人かが、小さくうなずいている。でも、おおかたの生徒は反応がなく、賛成なのか反対なのか分からない。

「ちょっといい案、思いついちゃった」

優希がうながすと、流星が続けた。

「いや、スローガンのことじゃなくて、全員リレー。やっぱ足の遅いやつは、走りたくないやつもいるわけじゃん。だから当日そのときだけ、そいつには急に体調不良になってもらって、代わりに俺が走っちゃうっていうのは、どうよ」

優希は開いた口が塞がらなかった。暗に誠のことを言っているのが、見え見えだった。斜め下を見ると、^②誠の握られたこぶしには、筋がくつきり浮いていた。

すると、あろうことか瞳子が、

「それ、案外いいかも」

ぼろりとつぶやいた。そのつぶやきを耳ざとくキャッチした流星は、

「だろ？ たまにはいいこと言うだろ？ 他に意見もないし、もう『心ひとつに必勝』で決まりでいいじゃん」^① たたみかけるように言った。

優希は、「透明なルール」の見えないロープに、クラス全体がうねうねとからめとられているような気がした。^③ 思わずつばを飲み込んだ。

「いや、まだ、意見が出るかも知れません」

注 *スローガン……目標を短い言葉で言い表したものの。標語。

*オブザーバー……会議で発言せずに端で聴いている人のこと。

優希がkarouじて、流れにストップをかける。

「ちっ。俺ら野球部はさー。優勝しないと、早朝ランニングが待ってるんだよ。それだけは、マジ勘弁かんべん」
流星の小言に、

「それ、変だよ」

優希の口から、思わず本音がこぼれた。誠が横でハツとするのが分かった。

「はあ？」

流星はとたんに不機嫌ふきげんな顔になって、

「変だろ何が何だろうが、部の伝統は、簡単には変えられないんだよ」

ぶっきらぼうに投げ返した。教室がざわつきだした。

⑤ 優希は我に返り、

「ごめんなさい。みなさん、静かにしてください」

と、声を張り上げた。

「スローガンの話し合いを続けましょう。他に意見がある人はいませんか」

ざわついていた教室が、だんだん静かになった。

「意見が出ないようなので、わたしからも意見を言ってもいいですか」

何人ががうなずいてくれた。

優希はつばを飲み込もうとしたが、口の中はからからで喉のどが引きつれた。そっと下を向いて、左の手のひらに目を落とした。ポールペンで書いた文字をあらためる。

よし、言うぞ。

「『心ひとつに必勝』。たしかにそれは、体育祭はクラスで得点を競う面もあるから、みんなで優勝を目指すというのも、ありだと思います」

ここで区切った。流星や瞳子たちが、でしょ、というようにうなずいている。

「でも、」

喉がむずがゆくなって、咳が出てしまった。喉もとを手で押さえつけた。誠が上体を少し倒して、優希の横顔に視線を送った。頑張れ、とエールを送ってくれている。

「でも、わたしのスローガンの案は、『勝つより楽しむ』です」

ひとまずここまで言うと、うなじがカッと汗ばんだ。

「どうということ？」

瞳子が間髪を入れずに、尋ねた。

「わたしが考えたのは、全員リレー。勝ちを目指すのではなく、全員で楽しんじゃうというのはどうでしょうか。三組のクラスカラーは黄色だから、黄色をモチーフにそれぞれ仮装して、楽しんで走るの、どうでしょう」

優希が一気に話し終えると、クラスがとたんに沸いた。

「え、なんか楽しそうじゃん」

「そういうのって、今までなかったよね」

「面白そうかも」

どんよりしていた空気がいっぺんに浮上した。わいわいと軽やかな話し声が飛び交った。そんなとき、

「はい」

瞳子があえて手を挙げた。優希の肩が緊張する。

「牧さん、どうぞ」

「それってルール違反にならないの？　ぶっちゃけ、そんなことしたら、北側先生に三組がにらまれちゃうよ。優希は、あ、佐々木さんは内申がいいから、気にしないのかも知れないけど」

⑥ 瞳子の言葉は優希の心をひつかいた。内申がどうか、考えもしなかった。

あの瞳子が自分に対して、嫉妬めいた気持ちを持つていたなんて。

それでも、瞳子は瞳子で、素直な気持ちを隠さずにつけてくれる。ありがたいことだと思う。

『勝つより楽しむ』のアイディアでいったん浮上した空気が、幕が下りるみたいに沈んでいった。

「牧さん、意見をありがとうございます。他に意見はありませんか？」

沈黙が流れた。

優希はひとつ咳払いをしてから、口を開いた。

「椿中では、この春からブラック校則がなくなりました。だけど現状は、それほど変わっていません。それは、目に見えるルールが無くなっても、透明なルール、目に見えないルールに、わたしたちが縛られているからなんじゃないかと思いました」

「透明なルール？」

瞳子が怪訝そうに眉をひそめた。

みんなの目がまっすぐ自分に注がれている。足を踏ん張っていないと、緊張で倒れそうだ。

「例えば、同調圧力。自由な髪型にして目立ちたくない、とか、先輩ににらまれるんじゃないか、とか……」

声が震えてしまう。

「あるある」

まどかがつぶやいた。

「あと、自分が自分に作ってしまおう、透明なルール」

優希が続けると、

「何だよそれ」

流星がつっこんだ。

「こういう場でも、反対意見を言ったら、嫌きらわれるんじゃないかって勝手に決めて、それなら黙だまっておこうって、何も言わない。でも本当は、反対意見を言ったらって、嫌われたりしないのに」

優希の言葉に、うなずく人が何人かいた。たとえ数人であっても、心を強くしてくれた。

「わたしは、米倉さんが言ったみたいに、ここには三十五通りの心があって、それぞれ思っていることや、意見があると思うんです。だから——」

一度言葉が切れた。

「だからわたしは、どんな意見であっても、みんなで、自由に、言い合いたい」

教室が、静まりかえった。

優希には、自分の心臓の音しか聞こえなかった。こんなに激しく脈打っているのに、血が届いていかないのか、指先は氷みたくに冷たくなっていく。

しばらくして、

「はい」

楓が手を挙げた。

注 *内申……ここでは高校受験の際に用いられる、中学校から報告する成績を含めた人物についての評価。

「庄司さん、お願いします」

優希の声がうわずった。

「うちは、あ、わたしは、佐々木さんの仮装リレー案が、面白そうだなって思いました。正直、全員リレーで足引っ張っちゃったらどうしようって、不安でしよがなかつた。うちも、勝つことより楽しみたい」

楓は一気に言った。頬が少し紅潮している。

「はい」

手を挙げた男子が、

「僕も、優勝狙いより、楽しむ方がいいとは思うけれど、仮装まではやりたくない。応援なら頑張るけど」

と言うと、誠が「同感」と小声でつぶやいた。

「はい。全員リレーじゃなくて、出たい人だけで走ればいいんじゃないですか？」

「はい。そんなことをしたら、他のクラスとフェアじゃなくなります」

「はい。他のクラスとも、仮装とかパフォーマンスで闘うとか」

「はい。今から種目を変えるなんて、出来るのでしょうか」

今までのロングホームルームではありえないくらい、次々と意見が続いた。

⑨ 冷たかった優希の指先が、じんじんしてきた。

(佐藤いつ子『透明なルール』)

問一 〜〜〜線ア「たしなめる」・①「たたみかけるように」・ウ「怪訝けげんそうに」とはどのような意味ですか。もっとも適当なものを次の1〜4からそれぞれ一つ選び、番号で答えなさい。

ア「たしなめる」

- 1 相手を注意して反省をうながす
- 2 強い言葉で相手をあつど圧倒する
- 3 的確な言葉で相手を言い負かす
- 4 相手の弱みにつけ込む

①「たたみかけるように」

- 1 わかったつもりで周囲をかえり顧みないで
- 2 自分の主張をあくまで曲げずに
- 3 味方を得てすっかり強気になって
- 4 相手によゆう余裕を与えず続けざまに

ウ「怪訝けげんそうに」

- 1 不安な様子で
- 2 疑わしい様子で
- 3 厚かましい様子で
- 4 不満な様子で

問二 〜〜〜線①「を切った」が「最初に物事をおこなってきつかけを作った」という意味になるように、にあてはまる言葉を漢字二字で書きなさい。

問三 〜〜〜線②「誠まことの握にぎられたこぶしには、筋すぢがくつきり浮ういていた」とありますが、このときの誠の気持ちを四十字以上五十字以内で書きなさい。

問四 —— 線③「思わずつばを飲み込んだ」とありますが、このときの優希の気持ちとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 流星の主張は身勝手なものであってスローガンとしては不適切なのに、無気力なクラスの生徒たちが安易に同意しようとしていることが分かって、心からあきれてしまった。

2 流星と瞳子の強い主張がクラスを支配し始めたことにより、本来自由にスローガンについて発言できるホームルームの時間からほがらかさが失われてしまい、驚きとともに怒りを感じた。

3 瞳子が賛同したことで自分の発言に自信を持った流星が発言をさらに強めてスローガンを決めようとし、クラスの生徒たちがそれに従いそうな雰囲気になったことに危機感を覚えた。

4 たくみに瞳子を誘導したことによりスローガンについて理解されたと感じた流星が、同じ手法で自分の主張にクラスの生徒たちを強引に巻き込もうとする姿におそろしさを感じた。

問五 —— 線④「横でハツとする」とありますが、なぜ誠は「ハツと」したのですか。もっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 先生に一任されて冷静な口調で話し合いを進めていた優希の、突然の変化に驚いたから。

2 リーダー的存在の流星を批判すると、クラス全員を敵にまわしかねないとあせったから。

3 この発言をきっかけに、優希と流星が仲たがいするのではないかと不安になったから。

4 話し合いの流れをかき乱すような発言をした優希の意図が全く分からず、混乱したから。

問六 —— 線⑤「優希は我に返り」とありますが、このときの優希の様子としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 あまりに筋ちがいな流星の言い分について不満をぶつけてしまったが、大事な発言こそ冷静に主張する必要があると気がついた。
- 2 流星の発言を聞いて反射的に感想をもらしたことに對して、挙手をしないで発言したことは謝罪するべきだと気がついた。
- 3 急に不機嫌になった流星を目の当たりにして、クラスの雰囲気悪化させた原因は自分の間違った発言だったと気がついた。
- 4 流星の主張に対する違和感いわかんをつい口に出してしまったが、進行役として話し合えんかっいを円滑に進めなければならぬと気がついた。

問七 —— 線⑥「瞳子の言葉は優希の心をひっかいた」とありますが、このときの優希の気持ちとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 クラスのリーダーである自分の提案に反対する人はこれまでいなかったのに、ルール違反だと指摘してきされ、批判されたように感じて悲しくなった。
- 2 自分は受験のことなど考えず、クラスみんなが体育祭を楽しめるように発言したのに、自分勝手だと非難されたように感じてとまどった。
- 3 自分の提案が先生にまで迷惑めいわくをかけるかもしれないなどとは思いませんでしたので、考えなしに発言してしまったことをくやんだ。
- 4 自分が良かれと思って発言したのに受け入れられなかったことで、瞳子の言葉は自分を責めるための口実であることを感じていらだった。

問八 —— 線⑦「透明なルール」の具体例としてあてはまらないものを次の1～5から一つ選び、番号で答えなさい。

1 私の学校では、誕生日近くの日曜日に家に友だちを呼んで誕生パーティーをする人が多い。ただしそのパーティーに呼ばれるのは女子だけで、ふだん一緒に遊んでいても男子を呼ぶ人はいない。

2 友人数人とレストランに行った。そのお店ではオムライスが有名で、友人をはじめ多くのお客さんがそれを注文していた。私はカレーを食べたかったが、結局オムライスを注文した。

3 クラスで交換日記がはやっている。人によっては複数のグループと交換日記をしていて寝不足が問題になったため、先生から禁止された。だが私と親友はとも仲が良いので今でも二人だけで続けている。

4 小学校では目立つことが苦手だったが、中学入学をきっかけに学級委員に立候補しようと意気込んでいた。しかし役割決めにすると、小学校からの友人にどう思われるか不安になり、手を挙げられなかった。

5 友だちが好きな音楽の話で盛り上がっているが、私はテレビをみる機会が少なくあまりよく知らない。けれども、友だちにその話題をもちかけられた際には、さも知っているかのようにふるまった。

問九 —— 線⑧「指先は氷みたいに冷たくなっていく」—— 線⑨「冷たかった優希の指先が、じんじんしてきた」とあります

が、このときの優希の気持ちを次の文章の X Y にあてはまるように、 X Y は三十字以上四十字以内で、 Y は四十字以上五十字以内でそれぞれ書きなさい。

線⑧では X Y に対して、線⑨では Y X 。

問十 本文の特徴を説明したものとしてみてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 多くの登場人物の視点に立つことで、具体的な情景が読み手の目に浮かぶようにしている。
- 2 登場人物の気持ちを表すためのたとえを用いて、その場の様子が理解しやすく描かれている。
- 3 「――」を使うことで話の展開上、不都合な内容を隠している。
- 4 「わいわい」「からから」という修飾語を使って、話し合いが上手く進むかどうか読み手の期待を高めている。

三

次の1～6の——線のカタカナは漢字で書き、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- 1 資料をセイサする。
- 2 歴史に関するチヨジユツを発表する。
- 3 スーツケースにニフダをつける。
- 4 計画をメンミツに練る。
- 5 昔は男子に兵役の義務がカされた。
- 6 深窓に育つた令嬢。

問題は以上です

